

	本年度重点目標	具体的な取組	評価指標	判定基準	集計結果	自己評価	分析(成果)(課題と改善策)	中間評価
学びに向かう力の育成と学力向上	【学びが楽しい学校づくり】 体験活動や学び合いを基に、一人一人が活躍すると共に共感的な人間関係づくりが図れる授業を目指し、学習意欲の向上と自己肯定感を高める。	・震災後の児童の心のケアを、外部の専門家ともつながりながら丁寧に行う。 ・生徒指導の4つの視点(自己存在感の感受・共感的な人間関係の育成・自己決定の場の提供・安全・安心な風土の醸成)を生かした授業づくりを行う。 ・学び合いを充実させるために、基礎基本が定着するように粘り強く指導する。児童自身が課題意識をもって主体的に学びたいような授業を目指す。 ・教科間や学級活動、学校行事とのつながりを意識し、計画的に学習を進めていく。	(児童アンケート) 「学校で学ぶことは、楽しいか。」 ア 楽しい イ だいたい楽しい ウ あまり楽しくない エ 楽しくない (保護者アンケート) 「お子さんは学校へ意欲的に登校しているか。」 ア 意欲的に登校している。イ おおむね意欲的に登校している。 ウ あまり意欲的ではない。エ 意欲的ではない。 (教職員アンケート) 「生徒指導の4つの視点を生かした授業づくりに努めているか。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない	児童アンケート・保護者アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが80%以上 D…それ以下	(児童) 100% (保護者) 96% (教職員) 100%	A	(成果) ・「学校で学ぶことは、楽しい」というアンケートに対して、アと回答した児童は84%である。スクールカウンセラーや外部の専門家と連携し、児童の心のケアを重視しながら学校での学びを進めてきた。学校が安心安全な場であるという意識を児童がもっているため、学ぶことが楽しいのだと思われる。 ・教員間で授業実践を交流したり情報を共有したりすることで、児童が夢中になって学ぶ授業づくりを進めることができた。 (課題と改善策) ・震災後の体験活動や学校行事が2学期はたくさんある。その中で、ただ参加するだけにならないよう、事前事後の学習を大切にしていき教科の学びにもつなげていきたい。 ・児童の心のケアを継続的にいいつつ、授業の中で児童同士の関わり合いを増やしていく。また、基礎基本の定着にも一層丁寧に取り組んでいく。	A
	【主体的に課題解決する児童の育成】(学校研究) 個別最適化された学びと協働的な学びの実現を目指し、教科の学びを課題解決へとつなげることができる児童を育成する。	・自分の考えを根拠を示して説明したり、記述したりできるように、教科を超え、継続的に指導を行う。 低学年では、自分の考えを根拠を示しながら口頭で説明することができるように、中学年では、口頭での説明から少しずつ記述することができるように、高学年では、何を問われているのかに気をつけながら記述することができることを目指す。	(児童アンケート) 「相手を意識し、自分の考えを根拠を入れて、わかりやすく説明することができたか。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった (教職員アンケート) 「授業中、児童一人一人の学び方を見取り、個に応じた学習ができるように指導の工夫をしているか。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった	児童アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが90%以上 B…ア+イが80%以上 C…ア+イが70%以上 D…それ以下	(児童) 94% (教職員) 82%	B	(成果) ・児童自身に解決する課題や、解決方法などを選択させる機会を増やしたり、児童同士で協力して解決する場面を多く設定したりすることで、児童が主体となって進める授業が多くなってきた。その効果として、以前より主体的に相手に考えを伝えようとしている姿が見られるようになった。 (課題と改善策) ・授業の中で児童に委ねる時間を多くすることで、児童の活動が多岐にわたり、一人一人が何をしているのかとすることが難しくなった。全員一斉で同じ課題をする授業形態と比べ、児童一人一人への指導や支援の仕方が変わってくる。それらに対応するために、日々の授業の中で児童の一人一人の様子を記録することなどを通して、教職員のみと力を高めたり、ICT等を活用して、児童の思考の状況を可視化したりすることを進めていく。	B
	【家庭学習の確立】 保護者と連携し、子どもたちの家庭学習の習慣化を図る。	・音読や漢字・計算練習(高学年は自学ノート)を基本に、学年に応じた家庭学習の時間を確保する。 ・家庭学習強化週間(特に、お便り等で呼びかけを行う。また、学級懇談では、家庭学習のつぎきを活用し日頃の家庭学習の取組について確認し、改善していく。必要に応じて、個別指導も行う。	(家庭学習調査結果) ・家庭学習強化週間記録カードをもとにした、家庭学習の目標(低学年20分・中学年40分・高学年60分以上)達成者数 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 60%未満 (保護者アンケート) 「お子さんは家庭学習の習慣が身につけてきていると感じるか。」 ア そう思う イ ややそう思う ウ あまり思わない エ 思わない	家庭学習調査と保護者アンケート A…児ア+保ア+イが90%以上 B…児イ+保ア+イが80%以上 C…児ウ+保ア+イが70%以上 D…児エ+保ア+イが70%未満	(質問紙) 81% (保護者) 82%	B	(成果) ・昨年度12月の保護者アンケートと比較すると、「お子さんは家庭学習の習慣が身につけてきていると感じるか。」の項目で、肯定的な回答の割合は6%上昇している。また、各学年の家庭学習の目標時間より10分以上多く家庭学習に取り組む児童も見られる。家庭との細かな連携や日々の意欲付けの成果と考えられる。 (課題と改善策) ・ほとんどの児童が宿題に取り組むことができているが、自らの課題や興味に合わせて自主的に考えて家庭学習に取り組むことができている児童は少ない。家庭学習のつぎきを活用し、日頃の家庭学習の取組について確認し家庭学習の取り組み方をしている児童を紹介したり、家庭学習の計画を立てる時間を設定したりすることで、より能動的に家庭学習に取り組めるようにしていきたい。	B
いじめ・不登校のない学校づくり	【特別活動の充実】 学級生活や学校生活をよりよくするために、児童同士の関係作りを進め、課題を発見し、話し合い、合意形成を図り、意思決定して課題解決に向かう児童を育成する。	・学級活動や委員会活動等において話し合う活動の時間を確保する。 ・児童が自主的・実践的に取り組むことを通して、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、課題を共有し、合意形成しながら解決に向かうようにする。	(児童アンケート) 「友だちの考えを聞きながら、自分の考えを話すことができるか。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない (教職員アンケート) 「児童同士の話し合いの場を設定し、課題意識の共有・合意形成が図られるように取り組んでいるか。」 ア そう思う イ どちらかと言えばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ そう思わない	児童・教職員アンケートで A…児ア+イが90%以上かつ職アが100% B…児ア+イが80%以上かつ職ア90%以上 C…児ア+イが70%以上かつ職アが80%以上 D…それ以下	(児童) 92% (教職員) 100%	A	(成果) ・各学年で学活の時間等に学級会を行い、児童に意思決定を委ねる取り組みを行っており、児童は自分達で話し合っって学級目標や活動の内容を決めることで達成感を味わうことができている。 ・教科の授業の中でも児童が主体となって課題解決のために話し合う場面の設定を意識している。 (課題と改善策) ・児童アンケートで、ウと回答している児童も数名だがいる。学級会が行われているが、話し合いに参加できていないと感じている児童がいると考えられる。参加している全員が発言できたり、自己有用感が感じられやすい話し合いにしたい必要がある。	A
	【規範意識の高揚】 社会的なルールやきまりの意味を理解させ、大切にすることを高め、いじめや差別、暴力のない学校をつくる。	・毎月、児童会を中心に学校目標を設定し、具体的に取り組むことを通して、社会的なルールやきまりに対する理解を深める。 ・全職員が全校児童の担任であるという意識を持ち、児童の様子を観察することで、いじめの兆候の早期発見を目指す。さらに、いじめ撲滅集会などを通して、いじめや暴力行為のない学校づくりを目指す。	(児童アンケート) 「児童会による学校目標が守ることができたか。」 ア できた イ どちらかといえばできた ウ あまりできなかった エ できなかった (保護者アンケート) 「学校は、いじめや暴力行為のない学校づくりに努めていると思うか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ あまり思わない エ 思わない	児童アンケート・保護者アンケートともに A…ア+イが95%以上 B…ア+イが85%以上 C…ア+イが65%以上 D…それ以下	(児童) 92% (保護者) 94%	B	(成果) ・児童アンケートの、高学年の肯定的な回答が100%に上昇した。委員会活動や代表委員会による学校目標を決める取り組みの成果と考えられる。 ・保護者アンケートが昨年度の結果と比較して、否定的な回答が0になり、肯定的な回答の割合が増えた。 (課題と改善策) ・低学年で学校目標を守れていないと回答した児童が15%いる。代表委員会で決めた学校目標を意識できていないのかもしれない。掲示や発表などを通して学校全体で意識していく必要がある。 ・保護者アンケートでは「わからない」と回答された方がいた。学校だよりや学級通信を通して、学校での取り組みを継続的に発信していかなければならない。	B
学校と家庭地域の連携	【自己健康管理能力の向上】 めあてを持って、自らよりよい生活習慣を実践しようとする態度を育成する。	・「早寝早起き朝ごはん」をはじめとした規則正しい生活習慣の確立を目指し、学期毎に「バランスアップ週間」を設定して取り組む。 ・児童会で「就寝時刻」「起床時刻」「メディア時間」のめあてを決め、保護者の協力を得て達成度チェックを行い、よりよい生活習慣の実践を目指す。	(バランスアップカードの結果) ・早起きのめあて(7時までに起床する)が達成できたか。 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 50%未満	バランスアップカードで A…ア B…イ C…ウ D…エ	めあて達成度 90%	A	(成果) ・バランスアップ週間の起床時刻調査で、学校のめあて達成率は90%であった。 (平日96%・休日84%) ・めあての時間を全員が達成できるように昨年度の結果を考慮して7時に設定したことにより達成率はアップした。 ・児童保健委員会で休日も平日と同じ生活リズムで過ごす大切さを呼びかけたところ、時間差が1時間以内がほとんどであり効果が見られた。 (課題と改善策) ・起床時刻を決めてしっかり意識して取り組めば新しい「習慣」になると言われている。必要な児童には保護者も含めて個別指導を行うとともに、覚醒は自分の意志でコントロールできるのさらに重点を置いて継続して指導と取組を行っていく。	A
	【家庭・地域との連携協力体制の確立】 家庭や地域と学校との繋がりを大切に、PTAや学校運営協議会を中心に協働をはかる。	・保護者・地域とつくるカリキュラムの実践を進め、地域(避難所)とつながる場を設定する。 ・学校ホームページ、学校だよりや学級だより等を通じて、学校の様子を知らせる。 ・震災後の諸課題について家庭・地域とともに考えていく体制づくりをする。 (学校運営協議会への参画)	(保護者アンケート) 「学校は、学校評価アンケートや学級懇談会、学校運営協議会などを通して、保護者や地域の思いを受けとめ、よりよく改善しようとしていると感じるか。」 ア そう思う イ どちらかといえばそう思う ウ どちらかと言えばそう思わない エ 思わない (教職員アンケート) 「保護者・地域とつくるカリキュラムづくりに取り組み、実践しているか。」 ア できた イ だいたいできた ウ あまりできなかった エ できなかった	保護者アンケート・教職員アンケートともに A…ア+イが80%以上 B…ア+イが70%以上 C…ア+イが60%以上 D…それ以下	(保護者) 96% (教職員) 84%	A	(成果) ・「学校は、学校評価アンケートや学級懇談会、学校運営協議会などを通して、保護者や地域の思いを受けとめ、よりよく改善しようとしていると感じるか」に対する肯定的な回答は96%であり、3%増となっている。授業参観で、保護者参加の授業を実施したり、避難所や地域・ボランティアと協働した教育活動を行ったりしたことが成果につながったと考えられる。 (課題と改善策) ・依然として「わからない」と回答する保護者みられる。全ての保護者にとって開かれた学校となるよう、保護者・地域と協働しより一層連携を深める。また、熟議を開催するなどして学校への理解を図っていく。	A
業務改善	【業務改善】 教職員が、心身ともに健康で、明るく元気に児童と向き合うため、一月の超過勤務を60時間以内に抑える。	・毎月、第3水曜日を定時退校日とする。また、個別で毎月2回マイ定時退校日を設ける。 ・予定退校時刻を設定し、週案に記載することで、時間管理を意識した働き方を推進する。 ・最終退校時刻は、19:00とする。 ・企画会議を週に位置づけ、計画的に企画・提案を行うことで業務軽減を図る。 ・8月13日~16日、4日間を学校閉庁日とする。 ・PTAの会合等で取組に対する理解を求める。	(勤務時間調査) ・一月の超過勤務時間が60時間以内である。 ア 80%以上 イ 70%以上 ウ 60%以上 エ 50%未満 (教職員アンケート) 「困ったことを言い合ったり、挑戦する場があったりして働きやすいか。(働き甲斐がある)」 ア そう思う イ だいたいそう思う ウ あまりそう思わない エ 思わない	勤務時間調査と教職員アンケート A…ア+ア+イが90%以上 B…イ+ア+イが80%以上 C…ウ+ア+イが70%以上 D…エ+ア+イが60%以下	(勤務時間調査) 4月~7月 94% 8月 100% (教職員) 100%	A	(成果) ・一月の超過勤務時間が60時間以内の職員の割合は94%である。被災を経験しライフワークバランスの意識が高まったこと、行事を分散したことで勤務時間の微減につながったと考える。また、行事等においては、複数体制で早目の提案を行い、見直しをもって業務にあたることができたことも要因の一つである。複数体制で業務にあたることで協働しやすい雰囲気づくりにつながっている。 (課題と改善策) ・キャリアステージによって業務に偏りが見られる。複数体制で業務分担したり、こまめな情報共有を行うことで、ライフワークバランスを保ちながら、すべての職員が働き甲斐のある職場と感じられるようにしたい。	A